



# 小網代通信

2017年 10月号 VOL-232

発行：小網代ヨットクラブ

編集：広報委員会

編集長：里吉美恵子

〒238-0225

神奈川県三浦市三崎町小網代1385-18

Tel&Fax 046-804-5550

(上記電話番号は、現在工事につき  
つながりません。)

## 今月の内容

- |                            |               |        |
|----------------------------|---------------|--------|
| ・連絡事項                      | 編集委員          | 1ページ   |
| ・「海外レース参戦記 ファストネットレース(前編)」 | 児玉 萬平 (テティス4) | 2~4ページ |

### 連絡事項 (編集委員)

#### 1. < 10月・11月クラブ イベントのご案内 >

##### ①KFR (レース委員会)

日時：10月15日(日) Eコース

11月19日(日) C、またはBコースですが、定置網の状況に鑑み変更を検討中

##### ②秋の週末クルージング 10月21日(土)~22日(日) 房総 保田(泊) 約14マイル

クルージング委員会より、(メンバー)アドレス登録者に案内されています。

夕食時、クラブメンバー同士の交流を深める懇親会が設定されていますのでご参加ください。

・係留費：4,000円/艇(一泊)

・懇親会費用：4,500円/一人 (別途) 個人払い 入浴費用：570円/一人

・申込締切：10月15日(日) 18:00までに下記アドレスへ

KYCクルージング委員会 [CruisingKYC@gmail.com](mailto:CruisingKYC@gmail.com)

##### ③ハーバー整備作業 10月28日(土)・予備日29日(日)

ハーバー管理整備委員会より、(メンバー)アドレス登録者には既に案内が配信されています。

当初21日と22日としておりましたが、水質の透明度が悪く事前調査が遅れたために変更。

・作業開始時刻：午前9時(漁協組合と共同で実施いたします)

・作業内容：係留アンカー・係留索の点検・海底の障害物の撤去

係留に問題のある艇は事前連絡、又は当日現場にてご指示ください。

ご協力いただける艇やメンバーの方々には引き続きご助力をお願いいたします。

##### ④小網代カップレース 11月3日(金・祝)~11月4日(土)

詳しくは、ホームページの「レース」で確認ください。レースや運営にも奮って参加願います。



小網代の秋空、龍雲現る!



【小網代ヨットクラブウェブサイト情報】 URL <http://koaziroyc.jp>

【次回予定 総務委員会 10月16日(月) 18:30~21:00 駐健保会館4階会議室(JR田町駅より徒歩10分)】

2017. 10月号-1

## ファストネットレース 参戦記(前編)

テティス4 児玉萬平

今年、8月の初め、私は英国ワイト島のカウズにいた。日本艇としては24年ぶりにファストネットレースに参加するClass40「貴帆」に乗船するためだ。

貴帆のオーナー北田氏とは、沖縄-東海レース、パールレースなどの長距離レースにダブルハンドで参戦するライバルクルーの面々がダブルハンドクラブと称する勝手連を名乗り、お互いの親睦を深めていく中で知り合った。

その彼がここ数年、自身の活動をヨーロッパのメジャーな外洋レースにターゲットを絞り、最も盛んな外洋フォミュラ・クラスの一つであるClass40をフランスで建造、ロレアンを拠点に経験を深める中で、世界の若いセーラーが外洋レースにチャレンジする様とその活躍を見て、日本人の若者にもこうしたレースにチャレンジする手助けをしたいと考え、その支援組織として一般社団法人 日本オーシャンレーサー協会(JORA)を立ち上げた。

そのJORAの2017年活動の一環として、いくつかのレースにエントリーした中の一つがファストネットレースだった。それぞれのレースには北田氏の相棒として成長を期待される若手のセーラーが乗船したが、ファストネットレースは5人の乗り組みだったので、勝手連の延長でJORAの理事となった私にも、ワールドセーラーにもかかわらず乗り組みの声がかかったのだ。

私にとってファストネットレース参戦は34年ぶりの夢の実現だった。

当時、日本外洋帆走協会(NORC)は国別対抗戦であるアドミラルカップに名艇サンバード、月光などを代表艇として日本チームを結成、挑戦し続けていた。英国南岸ワイト島のカウズからアイルランド南東端の岩礁ファストネットロックを回ってプリマスに戻る610マイルのファストネットレースはこのアドミラルカップの最終戦に組み込まれていたが、15名が犠牲となった1979年の大量遭難事故に代表される過酷なレースとして存在し、それを走り切ることはファストネッターとして一種の憧れの対象ともなっていた。



私はNORCの財務担当理事として日本チームの挑戦をバックアップする役割を担って、かのカウズの地に赴いていたが、残念ながらそれはプレイヤーではなく、ファストネットロックに向かってスタートしていく輝くばかりのレース艇を見送るだけの存在であった。その時抱いた、いつかこの海に挑戦したいという思いと夢は馬齢を重ねるごとに忘却の彼方に飛んで行き、完璧に地の底に埋もれていたのだ。

私の今回のファストネットレースへの参加は、追体験の旅ともなった。貴帆のホームポートであるブルターニュ半島の南の仏ロレアンに着き、泊地であるLa Baseに向かったのだが、そこで最初に目にしたのはエリー・タバリーのペンディックVの姿であった。48年前、この30数フィートのアルミ艇を油壺で見た、ヨットを始めたばかりの学生の目には異星から来たUFOの様に見えた。



当時、単独太平洋横断レースが企画実施され、同艇が圧倒的な速さで三崎港にフィニッシュ、あまりの速さにコミッテীরワッチが間に合わなかったと聞いた。その後しばらくは油壺に浮いていたのだが、それが今ではフランスの海の英雄エリー・タバリー記念館の動態展示艇として他のペンディック・シリーズの艇とともに完璧に整備され静かに舳わっていた。展示説明には、同艇が今に続く大洋横断レースモノハル艇デザインの基礎となったと書かれている、確かにワイドトランサム、左右のウォーターバラスト、全アルミ船体・革新の塊だったのだ。



ロレアンは貴帆のクラス 40 ばかりでなく多くの IMOCA60 のベースでもあり、VO65 (Volvo Ocean 艇) 「Dongfeng」や巨大フォイリング・トリマラン「GITANA17」など、世界中を走り回る新鋭艇の基地でもある。それらが第二次大戦の戦争遺構であるドイツ軍の U ボート格納庫 (ブンカー) の巨大コンクリート建造物の前に舳を並べている姿は異様でもあるが、現代の新鋭艇の基地として存在することに妙に納得させられる風景でもあった。

ロレアンからシェルブールを経由してカウズに艇を回航し、レースに参加するのだが、このコースもまた心躍るものがあった。私の愛読書にセシル・スコット・フォレスター著のホレイショ・ホーンブローワー・シリーズ、アレグザンダー・ケント著のリチャード・ボライソー・シリーズなどイギリス海軍士官を主人公とした海洋冒険小説シリーズがあるのだが、そこに描かれている世界がまさにこのビスケー湾、英仏海峡の沿岸が舞台なのだ。

ウエッサン、オルダニーなどのフランス沿岸の島々、海峡を渡って、レース中に通過するニードルズ、スタートポイント、リザードポイント、ペンザンス、ラウンジエンド・様々な岬の名が小説の主人公の活躍シーンとともに蘇ってくる。レース中はコクピットからプロッターチャートをのぞき込み、そここの岬の沖で行われたであろう様々な活劇シーンと重ね合わせていた。小説では圧倒的に英国側が有利に書かれているのだが、現代の戦闘(ヨットレースの・・)ではフランス側に大いに分がありそうだ。

シェルブールではカトリーヌ・ドヌーブのデビュー作であるミュージカル映画「シェルブールの雨傘」の撮影現場がそのまま残っており、青春時代の感傷に一人浸ってみたが、北田氏も含めて若い世代は同作品の存在を知らないという事実には軽くショックを覚えた。

ジェネレーションギャップついでに・・軍港の町シェルブールには海洋博物館があり、様々な潜水技術の展示がされていたが、その入り口に展示されていたのは深海探査船「バチスカーフ」、小学生の頃、日本海溝 1 万メートルの深海に潜る同船のニュース映画を食い入るように見、その黄色い船体が波間に沈んでいくシーンが目に焼き付いている・・・まあ、我々世代以上しか知らない話か。





スタート地点であるカウズにはスタート 2 日前に回航、参加艇 1000 隻を超えるカウズウィークの最終日、カウズの町を上げてのお祭り騒ぎの真ただ中に到着した。なぜ最終日なのかというと、カウズウィークの最中は宿も係留場所も 1 年前からでなければ全クリザーブできないのだ。

驚いたことに 34 年前、最初にカウズを訪れた時と町のたたずまいは全く変わっていなかった。英王室のヨットクラブ RYS(ロイヤル・ヨット・スコードロン)がある古城や、王室専用棧橋はもちろん、夏の間だけロンドンからカウズに移る RORC のオフィス、

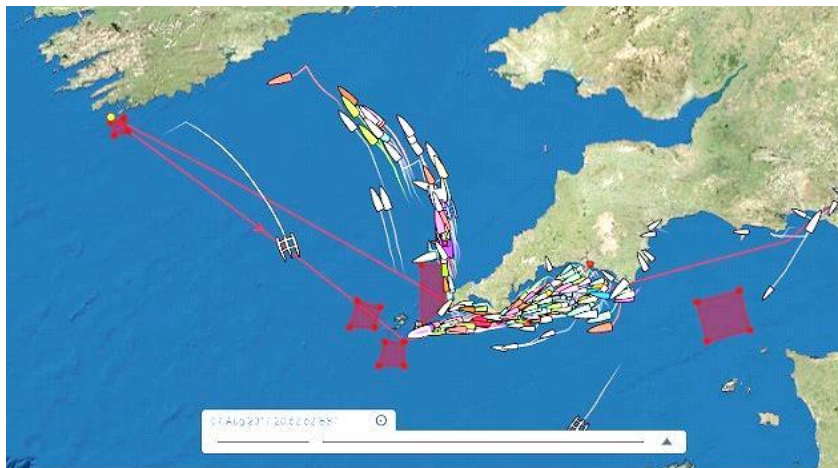


町はずれにあるヨット写真家のルーツ Beken of Cowes の店、当時アドミラルカップの取材に来ていた舵誌の契約カメラマンでスキー写真家でもあった志賀氏と飲み明かしたパブ・・・全てが変わってなかった。

最近の外洋レースのルーティング・プラン(航海計画)は、自艇のポーラーカーブ(性能曲線)と最新の天気予報に合わせてルーティングソフトが割り出すが、ファストネットレースのルーティングの肝の一つは潮汐流、スタート海域のソレント海峡は無論のこと英仏海峡は最大 4 ノット前後の潮が東西に行き来する。まさにレース当日が満月の大潮、潮の読みを間違えると立ち往生ばかりか逆に戻されてしまう。どの時刻にどの場所に位置させるか、ナビゲーターにとって、すべての情報を経験に照らし合わせて総合的に判断しなければならない神経戦でもある。

ルーティングのもう一つの課題は TSS(Traffic Separation Scheme:海上交通区分帯)の存在だ。主催者から提示される SI(帆走指示書)には TSS を航行してはならないと記されているが、その場所が英国の西南端のランジエンドとその沖にあるシリー諸島間の大部分、さらにはファストネットロックを回り終え帰路に就こうとするその場所に大きく立ちはだかつており、レース艇にとっては迷惑極まりない存在だ。しかもそこには航路ブイなどは無く、言ってみれば TSS は仮想回航点として存在し、ナビゲーターはチャートプロッターとにらめっこしながら転針点を決めることになる。

実際、2 日目の夕方、先行艇集団が追潮に乗って難なく通過して行ったランジエンドに我々が差し掛かったところで転流時となってしまった。まさに我々の目の前でゲートが静かに降ろされた形となり、仕方なくその先にある TSS を大きく迂回してファストネットロックに向かうことになった。



レースの様子は次号に続く